

カトリン・ローンシュトック編『義理の姉妹たち』について

— ドイツの二つのフェミニズムのもどかしい対話 —

立 川 希代子

Zu „Stiefschwestern — Was Ost-Frauen und West-Frauen voneinander denken“

Kiyoko TACHIKAWA

1 新しい壁 — 「わしら」と「あいつら」 —

東西ドイツ統一の日、中日新聞から電話のインタビューを受けて、私は次のように答えた。「ドイツ人の友人が、乾杯しましょ、と言ってきました。私自身これで戦争が終わったという感じです、うれしい。」(1990年10月3日夕刊) この友人は木村クリスタ先生である。われわれは会って乾杯した。しかし、はしゃいだ会話にはならなかったように覚えている。私はまた、その夏の西の新聞に「わしらの金をあいつらが使う」という見出しの記事があったことを話し、「西の人には自分たちが東の人を拾ってやった、という感情がある。差別ができなければいいけど」と心配している。デュッセルドルフのホテルの食堂に置いてあった地方紙の大きな文字は、統一を目前にした西ドイツの人々の歓迎の気持ちのとなりにある戸惑いや警戒心を象徴しているように思われた。そのことが印象に残っていたのだ。そして最後に大急ぎで私はつけ加えた。「統一した以上、福祉や女性を大切にする東側の“プラスの遺産”を大事にして」ほしいと。ドイツ民主共和国(DDR 東ドイツ)の福祉や女性政策に詳しいわけではなかったが、社会主義国のプラスの遺産を民主主義国である新しいドイツ連邦共和国(BRD)がひきついでくれたら、と希望しないではいられなかった。統一とは言うものの、実体は西による東の統合だと伝えられていたから、甘い期待であるとはわかっていたが。

統一から現在までの数年間、心配は事実となり、甘い期待は期待のまま終わろうとしている。もともとDDRにおける反体制・民主革命運動のエネルギーが国民のより豊かな生活への希求を誘発し、それを「ドイツ・マルク・ナショナリズム」が吸収する形で統一は実現した。しかし統一のコストは西の指導者の予想を越えて膨大なものとなった。コール首相の「西からの資金をそれほどつぎこまないでも……旧東ドイツ地域は数年で繁栄を謳歌するようになるだろう」¹⁾とのもくろみはずれ、昨1996年10月からは、社会扶助や失業手当の削減、病欠者の賃金カットなどの「緊縮財政措置」が実施されている。それでも今年1997年は史上最高の失業者数というニュースで明けた。失業率約12%、東の地域のそれは約18%だという。財政は厳しく、東の人々の暮らしは期待ほどよくなりず、双方の不満が相手方への蔑称、「ヴェッシー(Wessi)」、「オッシー(Ossi)」を生み出した。「わしら(ヴェッシー、

西のけちんぼ、いばりや)」と「あいつら（オッシー、東の金食い虫、文句たれ）」との間に新しく壁がつくられ、経済力をバックに西がいばっている。西へ移住した東の家族の子供が、「東へ帰っちまえ」といじめられている。²⁾

そのような壁が、さらに強固に、東と西の女性たち、しかもとりわけ女性のよりよい生活をめざして活動する女性たちの間に存在し、統一して活動する際の障害となっている事実を、私は、カトリン・ローンシュトック編『義理の姉妹たち—東と西の女性たちは互いに何を考えているか—』, „Stiefschwestern — Was Ost-Frauen und West-Frauen voneinander denken—“³⁾によって教えられた。この書の東と西の執筆者たちは「期待に待ちきれない思いで出会ったのだが、理解しあう難かしさに悩み、意見のくい違いにとまどい、失望し、相手に対して腹を立てあった」(序) 体験を率直に書いている。そこには現在のドイツが抱える問題が、そしてもちろんとりわけ女性たちが直面する問題が、それぞれの立場からさまざまな文体で語られている。

彼女たちが何をめぐって対立し、相手のことをどう考え、問題解決のために何を提言しているかをさぐり、未来のために共に考えたい。彼女らの問題の大部分は、私たちの問題でもあるから。

2 「義理の姉妹たち」の失望 — 統一の敗者としての女性 —

新しく同じ国の姉妹となった女性たちは、最初の興奮のあと、それぞれが大きな損失(不利益)に直面していることに気づく。損失のうち一番目立つのは、やはり東の女性たちの経済的自立の喪失である。「体制転換(ヴェンデ)」のあとすみやかに復活した家父長的秩序のために、彼女らは男性に先んじて失職し⁴⁾、再就職に成功する例も少なかった。国家の保護のない自由競争へほうり出され、東よりずっとひどい性差別⁵⁾の中で生きてゆかねばならない、と東の女性たちは考えている。

一方、西の女性たちには労働市場で強力なライバルが出現した。良質な専門的指導的労働力の不足に備えて女性たちが注目されはじめたちょうどその時にヴェンデが起きたために、東の男性と女性が一挙にライバルとなったのだ。そのうえ統一の後の困難の中で女性運動は片すみに追いやられ、それまでの運動の成果までもが停滞や後退の危機にさらされている。「ドイツの姉妹たちは双方とも統一によって多くのものを失った」ことを確認しつつ、西のマルグリット・ツァウナーは「なぜわたしは義理の姉妹たちを愛さねばならないのか。彼女らによって不利益だけを受けるというのに」と言い切る(「損失、あるいは新しい義理の姉妹からなにが得られるか」)。

共通の状況の中で共同して行動することを期待しあった「姉妹」だからこそ、失望も大きく、両者はたちまち「冷たい義理の姉妹の関係」(東のハンネローレ・ショルツ「頭の中の壁」)となり、「姉妹フラストレーション」(東のビルギット・ビュトワ「私見フェミニズム考」)が生じた。「働き続け、経済的基盤を持って生きてきた東ドイツの女性たちと、画一的な考え方を覆し女性解放の思想を社会通念の変化にまでもつていこうとしている西ドイツの女性たち、そのどちらがより先をいっているかではなく、足りないところをお互い補いあう形での女性解放運動がこれから地についていくであろう」と、佐藤洋子氏が統一直前に東京

ドイツ文化センターでおこなわれたシンポジウム「芸術と社会の中の女性」において発言されている⁶⁾が、補いあう形への模索はまだこれからの課題である。

おそらく、具体的な不利益以上に双方の女性たちを失望させているのは、相手方の無理解だろう。「なんにもおぼつかない穴にどさんと落っこちた」東の生活状況について「正確な知識を得るようにしてほしい」と、東のドロテア・リーバーは西のヤニーネ・ベルク＝ペアーに要求している（「西から東へ、東から西への手紙」）。東の執筆者の多くは、旧東ドイツの反体制・民主改革運動の担い手であり、新しい「未来の東ドイツ」のための憲法草案に男女平等規定を盛りこむことに成功していた。彼女らは批判の対象であった国とともに、希望の対象であった国をも失った挫折感の中で生活全般の「転換（ヴェンデ）」を迎えたのである。その点に理解を届かせている西の執筆者は少ない。ウルリケ・パウライテルは、「女性政策の点では、円卓会議による憲法草案はまがりなりにもヨーロッパの男性民主主義が過去200年に作ったなかでもっとも肯うことのできるものだ」としたうえで、西側政治がそれを一蹴したことを認めているが（「反目する姉妹たち」）。

東はそれでも選挙によって民意を問われた結果の統一である。西の国民は一度も民意を問われていない。基本法が予定していた新憲法も制定せず、州が連邦に参加するというかたちで大急ぎで統一がおこなわれた。⁷⁾ 西には「転換」はなかったものの、それゆえにまた受入れ態勢にも乏しかった。「西が基準で当然」という西の態度が相互理解を難しくさせているのは明きらかである。

しかし一方で、西のフェミニストたちが深く傷つきながらかちえてきた成果に、東の女性たちは無頓着だ。1968年の男子学生に対する女子学生の反乱を端緒のひとつとする現代のフェミニズムは、西の社会に色濃い母親崇拜、「女らしさ」尊重のイデオロギーと闘い続けてきた。戦争後も1960年代前半まで戦前の文化を継承し保守的だった西のドイツで、「文化革命」の一翼を担って社会の空気を変えてきた。職場や政治の場でのキャリアを、男性に協力を求めず自力で積みあげてきた。統一直前の西ベルリン政府では女性の閣僚が多数派だった。職場や政治の場で、クォータ制（割当て制）⁸⁾も定着させてきた。闘いが日常である生活の中で子供を産まないことを選択する際の屈折など「わかってほしい」と素朴に声に出せないだけに、西の女性たちのいらだちはつのる。フェミニズムの先輩として差しのべる手は、往々にしてふり払われてしまう。

そんな状況の中で『『男に盲従する東のママ（Mutti）』、『西の解放屋さん（エマンツェ、Emanze）』という偏見がバリアのように互いの頭に定着してしまった』（ウタ・マイヤー「東西女性のフルタイム家事労働」、マイヤーは、ヴェンデの直前、非合法に東から西へ移った）。「あの人たち西の解放屋さん（あるいは女権の闘士）は、わたしたちに命令ばかりしたが」とか、「あの人たち東のママさんが、わたしたちの足をひっぱる」という具合である。頭に「典型的」という形容詞がつく場合は、その形容詞も陰口の一部である。双方が相手を理解するゆとりを持たず、自分の主張や思いを述べるのに急な「対話」においては、執筆者たち本人も「わかってもらえぬ」もどかしさにいらだっているが、読者もまた相当もどかしい気持ちを味わわれる。それでも、無理解をふくんだまま切実に語り出されるそれぞれの主張の中に、女性運動の内部の重大な争点についての真摯な対話を読みとることは、さほど難しい。

3 仕事と子供 ― 両立か、選択か ―

「ママ (Mutti)」という語が東ドイツの女性たちの総称となりうるのは、彼女らの大部分が母親だからである。『義理の姉妹たち』の執筆者は、新聞、雑誌、放送のジャーナリスト、研究者、作家など 21 人であるが、東からの参加者の大多数が子供を持っている。編者のローンシュトック (1960 生) も東の出身で、息子と娘の母親である。巻末の執筆者紹介欄には、子供についての情報も添えられている。それによると、東からの参加者 13 人のうち 10 人に子供がいる。一方西からの参加者 8 人のうち子供をもっているのはひとりだけである (統一直前に西に移った 2 人は東に入れた)。

東では母親として働くことはあたり前だった。DDR 政府は、女性の労働力を必要としていたこともあって、母親たちの仕事と育児の両立を積極的に支援した。26 週間の産休、有給の育児休暇に代表される母性保護、完備に近い託児施設⁹⁾ などの一方、母親をふくむ女性への職業教育にも熱心だった。「育児、家事は女性の役割」という考え方や幼い子供への画一的教育といった問題点はあったが、東の女性たちは経済的独立を自明のものとして持っており、子供は私的な領域での大切な存在だった。

統一のあと彼女らはこの大切なふたつを失う危機に立たされている。女性政策の西の水準への切り下げによって、失業した女性の再就職は極めて困難になっている。就業中の女性も綱わたりの状態を強いられる。1991 年の東地域における劇的な出生率の低下 (1989 年の半数以下となった) は、市場経済の中にほうりこまれた女性たちの自衛であったと見るほかない。統一後の 2 年間は、東部ではまだ合法的中絶が可能であった。統一によって働かない自由、産まない自由という選択肢がふえたという側面はあるものの、両立をあきらめさせられた女性たちが大多数だったと思われる。

西では、「子供をとるか、キャリアをとるか」だった。子供を持つ女性の就業率は 1988 年で東が 80 %, 西が 43 % (就労可能年令全体では 1989 年で東が 91 %, 西が 54 %) だった。西の母親たちの過半数は無職で、有職で女性運動にかかわる女性たちの多くは「産まない」選択をした。そうした人びとにとって「子供はタブーだった」(東のダニエラ・ダーン「西の女性たちのタブー」) し、「異星人のように遠い存在だった」(西のヘラ・カイザーのタイトル)。1970 年代から出生率は減りつづけた。¹⁰⁾ 「産まない」選択は、西の根づよい母性尊重主義に対する反抗を意味していた。保守層の性役割意識に対してだけでなく、母性を男性社会の中に対等の価値として位置づけようとするフェミニズムの別派に対しても多数派のラジカル・フェミニズムに属する人々は反対した。「強いられた母性」を拒絶するためである。1871 年以来の中絶禁止法に反対する運動は、1992 年 6 月連邦議会で合法案が可決されるところまで盛りあがった。施行直前に与党議員の一部とバイエルン州政府が連邦憲法裁判所に提訴したせいで、施行は見おくられ、さらに 1995 年 6 月新しい禁止法が制定されてしまったが。¹¹⁾ ラジカル・フェミニズムは、おのが判断でシングルマザーとなった仲間に対してさえ、さほど積極的な支援をおこなっていない。そんな彼女らにとって、子持ちのジャーナリスト、子持ちの作家、子持ちの研究者などは、その存在自体が人生観をゆるがすものだった。

東部での劇的な出生率の低下を伝える記事に接したカイザーは、「救われた気持で」次のように考える。「いまやあの人たちも、なぜわたしたちが人生をこのように、他のようにで

は決してなく、過ぎしてきたのか理解してくれるだろう。」ところが、現実には産まない選択をしつつも、東の女性たちは「子供をとるか、キャリアをとるか」の二者択一を理解することはできない。「それはわたしたちにとって、二つともどうしても必要な当たり前のことなのに、どちらか一つだけを選びなさいと要求することである。そういう人々に自由という名でなにが売りこまれてきたか、驚くのははじめてではない。わたしは怒りに燃えながら、このドイツ連邦共和国という国家について一つのことを驚嘆する—どうやって国民の大部分に、自分は自由だと思いこませることができたのか、と」（東のエリーザベト・ヴェズルス「いま自由を手にしたというけれど」）。

東と西は、このようにすれ違っている。「あの人たち」と「わたしたち」の間につくられた壁は強固であるように見える。しかし西の女性も「子供とキャリアが両立するのは喜び」（カイザー）と考えており、保育所の閉鎖を見ているほかない状況の中で「東ドイツの積極的遺産を全ドイツに強く求めていく機会をわれわれはとり逃した」と考えている。「核の時代に子供は産めない」というメッセージが、子供のいない女性の情緒的安定のためにこそ使われる場合があること、女性芸術家の心理的抑圧の原因が子供である場合があることなどを、カイザーは示唆している。彼女はキャリアを積んだあとの高年出産がひとつの解決だとしているが、ということはつまり、子供が求められているわけである。

一方、旧東ドイツにおいても「子供と仕事の二者択一」がなかったわけでない。「男女平等は解決済み」との前提の体制下、フェミニズムが育ちにくかった東では、女性の自己実現をテーマとする女性文学がその機能の一部を果たしていた¹²⁾ののだが、代表的女性作家クリスタ・ヴォルフの作品『自己実験』（Selbstversuch）の主人公は、仕事に没頭して研究所で夜を過ごしたり……子供を産むことをいつまでも先延ばししていたため恋人と別れることになった女性の科学者である。建前と違って生活の中に真の男女平等が実現されていない、との認識が、統一の少し前から東の女性たちの一部を西のフェミニズムに近ずかせていた。

子供の問題に関しては、現実の違いの大きさが出会いの際目立ったわりには、問題の根は深くなく、今後東西で共同して要求行動を企て、実行する際の問題はそれほど大きくないように思われる。東の女性たちが失った両立を改めて自力で得ようとする時、西の女性たちが押しつけられた二者択一から視野を広げ、ほんとうに自由に人生の選択を考える時、共同の目標によって両者は容易に再び出会えると思えるのだが。すでに今、西にも増えてきた「仕事も子供も」望む人々の運動によって三才児（以上）の全員の幼稚園在籍の請求権が認められている。¹³⁾『義理の姉妹たち』の最後で直接手紙を交換して遠慮なくやりあっている東と西の女性（ドロテアとヤニーネ）が、前者は子供を持たず、後者は4人の子持ちというのは、明るい示唆に思われる。

4 男性たち — 敵対者か、パートナーか —

男性たちが女性の解放の当面の敵なのか、非人間的社会の中での犠牲者という点で同質なのか、という点でも東と西は対立する。男性への疑問、絶望から出発し、文化の男性性を批判するに至り、それへの男性からの呼応として「男性学」を生み出した実績（女性からの呼びかけは、主として先んじて発足させた「女性学」によっておこなわれた）を持つ西の女性

たちには、東の女性たちの男性観、男性に対する態度が不満である。

「東の女性って、どうしてああ躍起になって、こいつは男に立ちむかっている、と見とがめられないよう努めるんだろう？」(ヤニーネ)。「彼女たちは、やっとのことで統一を果たした組織の中で、西の女性たちの戦略に苦情を申し立て、西の女性たちが苦勞の末ようやく勝ちとったクォータ制や似たような他の救助策を拒絶する。東の姉妹たちの留保は、男性たちに歓迎されている」(ツァウナー)。「この頃じゃ、東の女性は男性の側に立っていて、なにもかもぶち壊してるとよく思うわ」(ヤニーネ)。

家父長的構造、性役割意識、男女差別を生み出しているのは、社会状況それ自体であり、男性ではない、¹⁴⁾と東の女性たちは考える。市場社会にともにかかわってゆくパートナーとして、生活に迫られることの多い東の女性は男性を頼っている。そのパートナーが、統一以来「西化」して、より攻撃的、支配的になったことの方が問題だ、と東は西に問題をふりむける。その、西の方が強い性役割意識こそが、西の女性たちを男性に敵対的にさせているのだ。神経をとぎすまして排除しないとたちまち足をとられるほど、女性を女性らしい領域(3K, 台所 Küche と子供 Kinder と教会 Kirche, あるいは新 3K として教会のかわりに美容 Kosmetik) に閉じこめようとする力は強い。

西のフェミニズムを性役割打破へむかわせるものとして、近代以来の重い伝統がある。ドイツ古典主義、ロマン主義が図式化した「理想の女性像」は、家をまもり、つつましく夫を助ける無知な(純な)女性、といったもの(ロマン主義では精神的に自立した才知あふれる女性も登場したが)である。ヴィルヘルム期にはドイツ民族の子供を育てる母であるよう要請された。理想像の呪縛や支配層の要請は、ワイマル時代、ヒトラーの時代を越えて、1960年代前半まで温存され、それへの反撥こそが、戦後の第二次フェミニズムの出発点だった。そのように、アメリカ、フランスのフェミニズムから学んだ西のフェミニズムは、一方で自国の性役割の重い伝統をひきずっている。それは支配層によってのみならず、それぞれの時代の多数の女性たちによってもひきつがれてきた。そういう「ドイツの女性運動に個有の困難」¹⁵⁾に西の女性たちは自覚的である。

東のフェミニズムは、統一直前に接した西のフェミニズムは別として、国家公認の社会主義フェミニズムである。社会主義国家として出発した際、過去とは断絶し、一挙に「解決ずみ」となった事柄の中に男女平等、女性の解放も含まれていた。ローンシュトックは、1989年11月のベルリンデモに「女たちよ、政治に乗りこめ」とのプラカードを持って先頭に立って参加した時、「私たちはもう解放されている」といらだって憤慨する女もいた、¹⁶⁾とふりかえている。

たしかに、1977年の家族法改正にいたるまで妻に対する夫の支配権が法で定められていた西にくらべれば、東の女性たちは解放されていた、と言えるかもしれない。経済的自立は、対等あるいは平等を支える大きな基盤であるから。今年5月のハンブルクでは、「男性はもう持ってます。女性もどうぞ (Man hat es. Frau auch.)」という銀行口座の広告が目立っていて、1977年以前の「夫の支配権」が何よりも財産の支配権であったことを思い出させられた。

東の作家ギーゼラ・カラウは、DDRを「欠陥はあっても、ドイツ人がこれまで国家に実現させてきた最善のもの」とみなしていたこと、その社会が「男女両性の関係における新し

い成熟の段階にも適している」と考えていたことを認め、東の読者を想定して「ひとりの解放された女性であるという思いから書いた」『男たちの愛』(Die Liebe der Männer) という小説が、西の働いて疲れている年老いた独身女性たちに受け入れられた体験を語っている(「年とった娘さんたちの微笑み」)。

西の厳しい男性排除にも、東の自明のものとしてのパートナー視にも、40年間の別々の歴史が、それぞれの社会のあり方が反映されている。「何しろ、すべてが違っている」(東から西へ移ったイーネス・ガイペルのタイトル)のだ。その中でもたとえば東の作家クリスタ・ヴォルフの『自己実験』の主人公の女性科学者は、目下の恋人である上司の男性が「愛する能力を失っている」ことを見抜く。体制に属する男性たちから人間性を奪うのは、3Kならぬ3W(経済 Wirtschaft, 科学 Wissenschaft, 世界政治 Weltpolitik)である。この主人公の視点は、西で女性たちが男性たちを見ている姿勢に通じている。それでもやはり、たとえば西のヴェレーナ・シュテファン、文学テクニストからマスキュリニズムを排し、全く新しい言葉で作品を書こうとする試みに比べれば、ヴォルフの制作態度は東的であるといえるだろう。

東の女性エンジニア(Technikerin)や女性の医者(Ärztin)が、単にエンジニア(Techniker)、医者(Arzt)という男性形の呼称で自分を呼んでいることに、西の女性たちは異議をとなえる(西のエルケ・ディール「-Innenに慣れる—社会的現実の表現としての言語—」)。DDRでは職業は男性形のみで示され、東の女性たちもそれを受入れてきたのに対し、西の女性は、自分を指すとはっきり分らない言葉で呼ばれることを拒んできたからである。彼女らは職業名を、女性語尾の-inを大文字化して-Inとした複数形-Innenであらわすよう提案し、東部でもいくつかの雑誌やフェミニズムの集団に受け入れられた。しかしそれ以上に広がっていかない。「多くの人々が足下の大地が崩れ落ちたような感覚である今この時に、女性の大多数が従来の言語構造に固執する気持ちはよくわかる」としながらも、ディールは東の女性たちが、西よりずっと前に始まっていた言語における女性解放への試み(男性形の名誉称号を女性に用いることへの批判など)を思いおこし、意識変革しながら言語を開拓し、占領する作業に参加してくれるように呼びかけている。

『義理の姉妹たち』には、しばしば不定代名詞 frau (man のかわりとしての)が登場している。「序」においてローンシュトックは、「(人は)お互いによく知りあっていない」という意味で、Frau lernt sich nicht kennen.と表現している。この書の執筆者たちの間では、言語が社会的現実の表現であり、ことばと解放の問題とは切り離せないことは、共通の認識となっている。その比重の置き方に東西の差異はあるとしても。ただし、出版後に東の読者がよせた「西の退屈な理論的演説」という批判¹⁷⁾の「理論的演説」の代表的なものがディール論文でないか、とも想像される。

ことばの問題にしる、対男性の姿勢全般にしる、それこそ四・六時中の、私的領域にも大きくかかわる問題なので、議論は複雑でわかりにくくなってしまう。この問題をめぐっての対話においては、相手の意見をまず受け入れて吟味する許容的態度がとりわけ必要であろう。それがあれば、パートナー視する際にも男性を無批判に受入れているのではないこと、排除する場合も、どのように関わっていくかを落ちついて考えるための排除であることが、見えてくるであろうから。

5 自立と自由 — 何が自立で、自由か —

東の女性たちは、「自分たちの就業状況や労働市場からの女性排除をテーマにし、対抗戦略を展開することによって、無意識に反家父長的に行動している。そういう女性たちも、フェミニズムという言葉や、反家父長的な要求を目の当たりにすると、自分たちの夫の広い背の後ろでふるえているような人たちなのだ」(ビウトワ)。東の女性たちはフェミニストをなめることをためらい、¹⁸⁾ 夫に依存している。職場では、ひとりでなにひとつ決断せず、文書作成すら自発的におこなおうとしない。「どうしてああも自立していないの」(ヤニーネ)というのが、西から東への疑問の最たるものである。

生活の激変、現代のフェミニズムに慣れていないこと、「社会主義では、意見とは支配者の意見の反復だった」からいい加減にしか受取られなかった事情などをドロテアは答としているが、東が西の自立への呼びかけにまともに応じようとしない、さらに根本的理由として、東の女性たちにとっては、自立とはまず何よりも経済的自立である、という事実がある。西の「姉妹たち」が、彼女らの基準からのみ自立を語る時、東の方は沈黙がちになり、それが一層非自立的に見えてしまう、という経緯が『義理の姉妹たち』のあちこちから読みとれる。

西の基準の押しつけに対する東の反撥はつよい。ローンシュトックは、「序」では相互理解のため「一方を他方の基準と決めつけたりしないような余裕をつくりたい」と編者の意図を語っているが、自ら寄稿した「沈黙してしまった東の女性」では、西の無理解に腹を立て、「わたしたちは東ドイツではもっと快適な生活をしていたのかもしれない」と、失ったものの大きさを測っているし、ショルツやカラウやビウトワは、西のツェアウナーに対抗するかのように東の女性たちがこうむった不利益を数えあげている。ウルリケ・シュテューリングは、「新しい義理の姉妹たちは、彼女ら自身（この西の国で）居心地よくないと感じているのに、わたしが感謝するよう期待している」といぶかしがる（「争うなら別のやり方で」）。

西の社会の最大の価値であり、西の女性たちのよりどころである自由にも、東の女性たちは疑問をさしはさみ、しきりに主張される自立も、結局は競争社会の中の強いられる自立ではないか、と問いかける。詩人のヴェズルスは、「西ドイツの女性芸術家がその下で生活していたような、ひどい労働・生活条件がわが身にせまりつつある」と感じながら、「仕事か子供か」の選択を国民に迫る国家が「どうやって国民の大部分に、自分は自由だと思いこませることができたのか」と問うたのだった。彼女はまた、「概念として自由そのものがあるわけではない。……わたしにも手にすることができるものだけが自由なのである。東ドイツ出身のわたしたちは、いくつかの重い束縛を背後に捨てることができた。しかしその時貴重な自由も失われていったのだ」とも言う。

1991年秋のミュンヘンでの女性芸術家助成協会に参加したとき、ヴェズルスは西では「仕事か、子供か」の二者択一であること、それを女性芸術家たちが受入れていること、西の女性たちが、個人ではうまく請け負えない課題を国家に請求することさえ拒み、すべて自分たちだけですべきことだと考えていることを知った。「自由が幻想になっている。…自由が現実を喪失させている」と彼女は慨嘆する。自由と自立を自負する西の女性たちに、「あなたたちは、人生においてのほんとうに重大なことがらについては、わたしがギョッとするほど

つつましい」と、ドロテアも水を浴びせている。ローンシュトックも、国とのかかわりを拒む西の自立について、「国家以外のなにが女性にやさしい構造を法律の形で実現させられるだろうか」と、そうした法律を支持する男性たちにも期待しつつ、疑問を呈している。

社会主義の女性政策を「生活してきた」東の女性たちの目には、西の自由の「幻想」性が、その中の自立が強いられたものであることが、とりわけくっきりと見えるようだ。しかし、彼女らの批判の正しさにもかかわらず、西の自立にはまたそれとしての輝きがある。西の女性たちが社会の状況に主体的に関わり、議論し、自助活動のネットワークを積極的につくってきた事実は重い。競争社会の中で業績をあげ、トップやそれに近い位置を占め、それで満足せず女性たち全体の地位向上のためにクォータ制その他の促進策を実現させてきたことの評価が一方でなくてはならないと思う。

女性の問題は女性が解決する、という自助・自立の精神を、西の現代のフェミニズムは、19世紀後半以来のドイツの女性運動から受け継いでいる。1887年にプロイセン王国文部省と同議会に対して女子教育の現状の改善を求める請願書を他の5人の女性とともに提出したヘレーネ・ランゲは、プロイセン政府の正式決定を待たず、自分たちの要求を実践に移した。みずから教育機関や教育ネットワークを作り、これに対する公的な援助と認定を求めたのである。¹⁹⁾ こうした活動スタイルをつくり出したブルジョア女性運動穏健派の人々は、母性を社会的なものとみなして、母性パワーによる社会変革をめざしていた。現代フェミニズムの多数派は強い母性を拒んでいるが、女性的価値観を社会の支配的価値観に高めようとした点は、活動スタイルとともにこの派の人々から受け継いだ。西の女性たちの自立は、東の経済的自立ほど具体的でなく、精神的自立が中心であり、自由もまた精神の自由が中心であるが、ドイツの、そして世界各地の歴代の女性運動から受け継いだ人権の精神がその核となって輝きを与えている。

6 共同行動にむけて ― 感情を考慮に入れよう ―

東は、「自由を得たかわりに、さまざまな権利を失い」(ショルツ)、西の社会で女性として労働市場ではもはやなんの価値もなく、年配の女性はやらない、とか、子供の養育はもう社会全体の責任でなく、女性が性的対象として広告や映画のスクリーンに陳列される、などを経験し、²⁰⁾ 女性運動の内部でも西に主導権を奪われがちである。西は、統一のコストを、労働条件の悪化や福祉の切り下げなどで、男性以上に支払われる上、女性運動では、自分たちの隊列に東のプラスの遺産をもって参加してくれるだろう、との期待を裏切られ、さらに妨害されている、と感じている。双方の女性たちが失望している。

失望が不信をつのらせ、新しいドイツの中で自分たちの生活条件を共に作るための行動は始まらない。どうすればよいか、を提言している何人かの発言の中に、感情についての発言が目立っている。メヒティルド・ヤンゼンは、相手の損失をわがことのように理解するための感情移入を勧める。彼女は、東の女性たちの統一直前の希望や達成感(したがってその後の挫折感)に理解を及ぼしているひとりである。西の女性たちの妨害された不満については、東に理解を求めている(「決して西の優勢だけではない」)。「ドイツでは感情について話すことは好まれなかった。わたしたちは今それを試みなければならない」と、カイザーは呼

びかける。

シュテERINGは、相手の繊細さに自分の感情をよりそわせるよう提言しつつ、一方で編者のローンシュトックに『義理の姉妹たち』というタイトルの不適当さを訴えている。姉妹として愛しあうべき、と押しつけられるとかえって心を閉ざしてしまう場合もある、と。「西だからあの人は男性に敵対的」という受けとめ方をしないように、とも彼女は提言している。この提言は、「真のフェミニズムとは何かを争っては駄目」（ビュトワ）の提言とともに、編者の望む余裕を生み出す貴重な提言と思われる。それはそのまま、「東のママ Mutti」と「西の解放屋さん Emanze」というレッテルの解消にもつながるはずである。

余裕をもって相手に対する場合には、西と東からの次のような提言や警告は、考慮の価値あるものとして受け入れられるであろう。「東の女性たちが、…気のいいママさんの態度で…フェミニズムや女性議員の割当てなんて必要ないと思ってるとしたら、この種の父権的な陰謀から身を守ることが肝要だ」（ヤンゼン）。「西の女性研究は、（多かれ少なかれ無意識にはあるが）社会福祉国家の解体をめざす保守的政策には有利に、そして東の女性たちには不利に作用している」（ビュトワ）。

『義理の姉妹たち』の東の執筆者の多くがDDRの時代の方がよかった点があることに触れている。彼女たちは、東の人々全般のオスタルギー²¹⁾を、とりわけ女性政策に関連させて共有している。一方、彼女たちがかつての改革運動で西の民主主義によせた期待は大むね裏切られたというものの、東の人々が西の高福祉社会に救われた側面はたしかにある。²²⁾ 現在は後退が目立つが、旧東の人々の願いが統一ドイツを再び「平等」に重きを置く社会に方向転換させるのに役立つ時がくるのではないだろうか。

東と西の女性たちの考え方は、フェミニズムの二大潮流、平等派と差異派に、おおよそ位置づけられる。東の女性政策は、社会主義的平等思想に裏打ちされていた。西の性差を鋭く意識するフェミニズムは、保守的母性主義との対決にもかかわらず差異派的である。平等派と差異派の「主張は正反対で相いれないものと考えられがちだが、実際には、その違いは表面的な対立の厳しさほどには大きくない。」²³⁾ 西のフェミニズムには平等派的考え方がすでに含まれており、東の人々は、差異派の男性原理批判や男女平等の意味そのものの検討作業に触れて、思想の幅を拡げてゆくであろう。

オスタルギーにもかかわらず、過去のDDRに戻りたい、という人はない。個人が尊重され、多様な生活が選択できる自由な社会において「普遍的に平等な権利は、今日の生活様式における差異が尊重されたうえで、調整されて、至るところで差別なしに生活できる場合にのみ存在するであろう」（ヤンゼン）。産む性である女性は、はだかの資本主義の下では弱者たらざるを得ない。経済的自立の重視も、自己責任に重きを置く自立も、それだけで資本の論理に対抗することはできない。女性の個人としての尊厳をあたり前のものとしてくれた先人たちの努力を忘れず、大切なものは何かを見すえつつ共同して事にあたる力を養いたい。東や西の女性たちだけでなく、わたしたちも。

注

- 1) 三島憲一編・訳『戦後ドイツを生きて—知識人は語る—』(岩波書店) 編訳者解説 363 頁。
- 2) 1997 年 1 月 4 日の朝日新聞朝刊「16 歳の世界地図」欄。
- 3) „Stiefschwestern — Was Ost-Frauen und West-Frauen voneinander denken“ hrsg. von Katrin Rohnstock, Fischer Taschenbuch Verlag, 1994.
この書に収められた 21 篇の寄稿のうち 10 篇を選んで翻訳したのが、『女たちのドイツ—東と西の対話』(カトリン・ローンシュトック編, 神谷裕子, 小林昌子, 鈴木仁子, 立川希代子, 中村真奈美, 奈倉洋子, 山田やす子訳, 1996 年, 明石書店) である。本論考は, 翻訳作業中に共訳者から得た知識や訳文に多くを負っている。
- 4) 「誰が職場を離れるべきかという決定に際しては……疑わしい場合は, 男性が残り女性が去る」im Zweifel für den Mann und gegen die Frau《という男性の責任者の思考パターンが適用された。》(ツァウナー「損失, あるいは新しい義理の姉妹からなにが得られるか」) 原著 35 頁。また, アストリット・ルートハルト(東)は, 「さらば, 朴訥な東の姉妹よ」において, ヴェンデの時期放送の現場で男性が退き女性の活躍の場が広がったが, たちまち東出身の西風男性がやってきて上司におさまった, という体験を報告している。原著 45 ~ 46 頁。
- 5) 「性差別は昔からあったけれど, 統一後もっとはつきりしたし, 前より大きくなったと思う」とか「西では街を歩いているだけで, いたるところで男女差が見て取れるけれど, 東はこうじゃありませんよ。……こっちのほうがずっとひどいですよ」とかの発言を, 『ドイツの見えない壁—女が問い直す統一—』(上野千鶴子他著, 岩波新書) が紹介している (75 頁, 203 頁)。
- 6) 『日本・ドイツ・女性の新しいうねり—その思想と行動—』(東京ドイツ文化センター編, 河合出版, 1990 年) 20 頁。
- 7) 三島憲一 前掲書 364 頁。
- 8) 政党や公共部門において, 女性に一定の比率を割り当てる制度。山田やす子「ドイツの男女雇用機会均等化—クォータ制について—」(皇学館大学紀要第 35 輯, 1996 年) に詳しい。『日本・ドイツ・女性の新しいうねり』には, »im Zweifel für die Frau und gegen den Mann《の精神で採用が行なわれるハンブルク大学の例が紹介されている (81 ~ 82 頁)。
- 9) 『女たちのドイツ』の解説(奈倉洋子, 190 ~ 91 頁)や, 姫岡とし子著『統一ドイツと女たち』(時事通信社, 1992, 95 頁)に簡潔な説明がある。
- 10) 1985 年には出生率は 1.28 % を記録して, 人々の関心をあつめた。その後の家族政策によっても, わずかししか回復していない。
- 11) 『女たちのドイツ』の訳者によるドイツ情報のうち「刑法 218 条(妊娠中絶禁止条項)」(小林昌子) に詳しい (80 ~ 82 頁)。
- 12) 長谷川弘子「東ドイツ・フェミニズムの特徴—クリスタ・ヴォルフ『自己実験』—」, 『現代ヨーロッパ文学の動向』(中央大学出版会, 1996 年) 所載。
- 13) とはいえ, 「統一ドイツの財政状況がもうその請求権の実現を阻止している」(ウタ・マイヤー)。例外的に要求以上を実現しているハイデルベルク市の場合を, 1995 年 6 月 9 日付の DIE ZEIT が報じている。„Kinder, Kinder—wohin mit ihnen?“ (S. 66.)
- 14) Ulrike Helwerth/Gislinde Schwarz: „Von Muttis und Emanzen — Feministinnen in Ost—und Westdeutschland“ Fischer Taschenbuch Verlag, 1995, S. 138.
- 15) Rosemarie Nave-Herz: Die Geschichte der Frauenbewegung in Deutschland, Landeszentrale für politische Bildung Rheinland-Pfalz, Mainz, 1986, S. 15.
- 16) 『ドイツの見えない壁』52 頁。
- 17) 『女たちのドイツ』解説, 184 頁。

- 18) „Von Muttis und Emanzen“, S. 62-8.
- 19) 姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』（勁草書房，1993 年）31 ～ 32 頁。
- 20) 西のウルリーケ・ヘルヴァートのインタビュー報告「ふたりのクリスティーネ」には，統一を同じベッドでむかえた東と西のクリスティーネのうち，西が仕事中毒であり，東は「西に教えられて」物質志向である様子が語られている。
- 21) 東へのノスタルジー。『私たちのドイツ』ドイツ情報「東のアイデンティティ」（神谷裕子，42 ～ 43 頁）参照。今年 8 月 11 日付の「アエラ」にも，「旧東独生まれの心の闇」についての報告がある（67 頁）。
- 22) 『統一ドイツの女たち』191 頁。
- 23) 『近代ドイツの母性主義フェミニズム』9 頁。